



©Hikaru Hoshi

第182回定期演奏会

一般発売4/7[会員先行4/5.6]

2021年5月14日(金) 17:45開場 18:45開演
三井住友海上しらかわホール

指揮/角田鋼亮(当団常任指揮者)

- ・J.S.バッハ: 音楽の捧げものBWV1079より「6声のリチェルカーレ」
(編曲: ヴェーベルン)
- ・ヴィラ・ロボス: ブラジル風バッハ第2番
- ・ブラームス: 交響曲第4番 小短調Op. 98

夢幻の虹と官能美の薫るシュレーカー(室内交響曲)に、天才モーツァルトの堂々たる到達点《ジュピター》と、楽都ウィーンの歴史に輝く傑作ふたつをお楽しみいただいている3月定期に続いて、新しいシーズンの始まる次回・第182回定期(5月14日)も、我々が常任指揮者・角田鋼亮と共に、オーケストラの多彩をぐっとひきだす選曲の妙をお楽しみいただきます。

その3曲のプログラムに隠されたテーマは、《バッハへの敬愛》とでも申しましょうか。いつけん時代も国もばらばらに見える選曲なのですが、聴いてみるとなるほど共通するものがあって、作品たちがお互いに面白さを照らし合います……という仕掛け。

実際にお聴きいただければ、一聴瞭然(なんて言葉はありませんが)のところながら、ちょっと予習がてら、種明かし風のご案内をしておきたいと思えます。

◆バッハの宇宙、新たな色で —— バッハ/ヴェーベルン《6声のリチェルカーレ》

プログラムの最初は、バッハ/ヴェーベルン編曲《6声のリチェルカーレ》(1935年)です。これは、バッハにあまり親しみのないかたにも面白くお聴きいただけるはず。

なにしろ、オーケストラのもつ色彩的な表現を(本日のシュレーカー作品とはまったく別のやりかたで)、とても切り詰めた音選びで追究した……ちょっとモダンな(しかし聴きやすくて豊かな)アレンジなのです。その(吟味の極致)とも言うべきサウンドは、オーケストラ作品の歴史でも特筆されるもの。ぜひ、その音空間を実演でこそ体験していただきたいと思えます。

原曲は、ドイツの大家ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685~1750)が書いた《音楽の捧げもの》BWV1079(1747年)という曲集から、《6声のリチェルカーレ》。ざっくりばらんに言うと、6つのグループが主題をつぎつぎに模倣しながら追いかけてゆく、その巧みな重なり合いを楽しむ(リチェルカーレ)(フーガ)と似ています。

もともと、楽譜には楽器の指定がありませんので、6つの声部を弦楽器で弾いたり、管楽器をまじえてみたり、はたまたチェンバロで弾いてみたり……と自由なのですが、これを小編成オーケストラ用にアレンジしたのが、ウィーン生まれの鬼才作曲家アントン・ヴェーベルン(1883~1945)。

ヴェーベルン自身、ぶ厚いオーケストラ・サウンドとは真逆の、簡潔な……しかし楽器の音色まで細かく配慮して、厳密に音を選び抜いた書法を追究した作曲家でした。

そんな人が編曲したバッハは、冒頭、静かにあらわれるテーマからして、およそ「バッハっぽくない」響きかたをする編曲です。

ふつうなら、弦楽器なり木管楽器なり、一息で演奏されそうなテーマからして、メロディの途中で楽器が変わるという変わったやりかた。しかも、弱音器をつけたトロンボーンからホルン、トランペット……と歌が受け渡されてゆく、その(ちょっとモダンでもある)サウンドは、バッハ時代にはまあありえない発想です。

しかし、この工夫 —— メロディをひとつの楽器で一息に歌わず、さまざまな楽器の異なる音色で彩ってゆく——が、このあとも多彩な組み合わせで展開されてゆき、耳が慣れてくると、(バッハ時代のサウンドとは違うけれど、この作品のもつ音宇宙の魅力、なるほど独自の色づけで現代に惹き寄せているな……)と感じられるでしょう。幾つものメロディが巧みに織り重ねられてゆく流れを、不思議な色あいのサウンドが見事に美しく浮き彫りにしてゆく、オーケストラ表現の奥深さをすっと愉しめるはず。

ちなみに、バッハがこの短くも豊かな作品の主題として取り上げたメロディは、音楽好きのプロイセン王・フリードリヒ大王から与えられた主題です。この(大王の主題)から、なんと豊かな音の宇宙が広がってゆくことか……!

◆バッハとブラジル、時を超えて出逢う魂 —— ヴィラ=ロボス《ブラジル風バッハ第2番》

2曲目は、20世紀ブラジルの大家エイトール・ヴィラ=ロボス(1887~1959)の《ブラジル風バッハ第2番》(1930年)です。

なかなか実演で聴ける機会のない、しかしとても魅力的な作品なので、お聴き逃しなく。

タイトルの訳とは難しいもので……バッハの音楽がブラジル風味に料理されたものを想像されると、ちょっと違うので念のため。バッハの音楽、フーガやトッカータなどその様式の面白さと、ブラジル音楽の豊かな要素とを自在に混ぜ合わせた……というイメージが近いかもしれません。

実際、全9曲ある《ブラジル風バッハ》(8本のチェロのための第1番をはじめ編成もまちまちで、ピアノ独奏やオーケストラ、合唱、はたまた有名な第5番のようにソプラノ独唱とチェロ8本というもの)のなかで、次回定期でお聴きいただく第2番(室内オーケストラのための)は、冒頭からいきなりテナー・サクソフォンの独奏などジャズの影響も濃厚なサウンド。全4楽章、ブラジル各地の民族音楽からインスピレーションを受けた色鮮やかな歌とリズムがたくましく美しく溢れ、「どこがバッハ!」と仰天されるかも知れません。

とはいえ、考えてみれば、バッハにしてもさまざまな舞曲を自在に取り込んで豊かに昇華させたりしたひと。しかも、バッハの成し遂げた巨大な創意工夫は、クラシック音楽はもちろん、後世のジャズやポップスにまで、強烈な影響を与え続けています(その発想を軸に、サクソフォン独奏による見事なバッハ演奏を録音したアルバム『バッハ・シークェンス』を発表したのが、次々回の第183回定期にリストとしてお迎えする名匠・須川展也。この(サクソフォンによるバッハ)も併せてお聴きいただくと、来季定期シリーズはさらに面白くなるというわけです)。ヴィラ=ロボスの力強く魅力的な音楽にも響く、(バッハの素晴らしさ)への深い敬愛……ぜひ、ホールを揺らす空気の内を探してみてください。

ちなみに、《カイピラ(田舎)の小さな汽車》という副題をもつ終楽章は、独立して演奏されることもある人気曲。ブラジルの民族打楽器が数々にぎやかにリズムを刻み、農夫たちが乗る小さな蒸気機関車の様子を音で描いてゆく……という、とても楽しい音楽(オーケストラ書法の面白いこと)なのですが、この楽章も正式タイトルは《トッカータ》。バッハへのまなざしが隠れているのです。

◆バッハへの敬愛、昇華の先へ —— ブラームス(交響曲 第4番 小短調)

そして次回定期の後半は、ドイツの大家ヨハネス・ブラームス(1833~97)晩年の傑作・交響曲 第4番 小短調 作品98(1884~85年)です。

ベートーヴェンが亡くなったのが1827年。世間ではこの大作曲家の記憶もまだ鮮やかな頃に生まれたのがブラームス……といえば、時代がイメージしやすいでしょうか。古典派からロマン派の時代へと音楽の潮流も激しく動いてゆくなか、19世紀の末まで長く創作活動を展開したひとです。

ブラームスは若い頃から、モーツァルトやベートーヴェンなど先輩の作品はもちろん、バッハなどバロック音楽から同時代のロマン派まで、さまざまな音楽を広く熱心に研究して、その知見を自身の創作へ活かしていたひとでした。もちろん、バッハも。

コンサートの予習に、明快にして知見豊かな一冊である西原稔『作曲家◎人と作品 ブラームス』[音楽之友社/2006年]をお勧めいたしますが、この本でブラームスを(近代の総括者)としているのは、深く頷ける指摘だと思います。ブラームスの創作、その歩みに光っている(伝統)への眼差し……それは、次回お聴きいただく交響曲第4番にも深く宿っています。

ため息が歌われてゆくような美しい冒頭のテーマ……その色合いとは対照的な律動的な動機もあらわれ、緊密な展開がくりひろげられてゆく第1楽章から、力みなぎる中にもどこか古めかしい印象が漂うには、ブラームスの作曲技法にさまざまな工夫がされているから。詳しくは当日の解説に譲るとして —— 終楽章がまた凄いです。

これは、バッハのカンタータ第150番《主よわれは汝を求む》の終曲にもとづいた主題による、パッサカリア(古い変奏形式)の楽章。しかも、30の変奏にソナタ形式の骨格が仕込まれているというから、巧みなものです(作曲の過程を知る同時代人の証言など、前掲の西原本をご参照ください)。磨き抜かれたほんとうに美しい変奏たちに身を任せるうちに、オーケストラ表現の立体的な深みまで堪能できるはず。

ブラームスがかねがね研究を重ねていた、中世・バロックの教会音楽からの影響も、トロンボーンのコラールなどに聴くことができるでしょうし、なによりバッハへの敬愛を自らの独創的な(そして、壮大な!)音宇宙へひらくその手腕は、何度聴いても感嘆のほかありません。

—— 古きを知り、新しきをひらく。バッハをめぐる3つの傑作たちで始まる、マエストロ角田&セントラル愛知交響楽団の新しい旅を、ぜひ一緒に。

やまの たけひろ 山野雄大

Profile



ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライター・ノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》司会・構成。